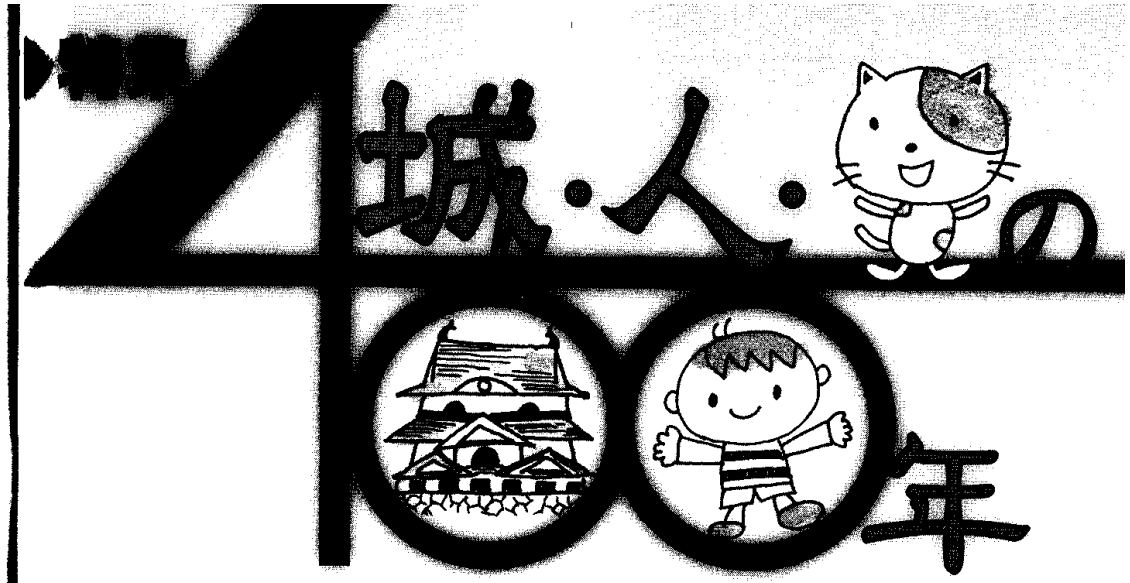


二つの城

400年あまり前、関ヶ原の合戦が彦根の歴史にくっきりと線を引いた。新しく生まれたのは、彦根山に凛と座する白壁の砦と城下町。そして無念にも焼け落ちた佐和山の城跡。彦根を語る二つの城に迫ろう。

彦根城の見方、歩き方 5
あやしい取材班 彦根城を極めに行く 8
こんなトコからお城が見える 11
もうひとつの名城・佐和山城 22
佐和山一夜城プロジェクト 25
北近江百景 38
彦根藩政と湖北・長浜 42
400年祭イベント情報 45

まちを慈しむ人たち

殿様の庇護のもとで育まれた層の厚い彦根文化は、平成の今、どんな風に慈しまれているのだろう。ご城下の人びとの彦根の愛し方は三人三様、十人十色。江戸の香り残る町並みもくらしのひとこま。

彦根景観フォーラム 14
小路を歩けば江戸時代人 18
手づくり甲冑教室 26
城下に踊れ彦根リンゴ 29
まちなか博物館 32
大塚対談・北村昌造さん 46

にゃんこたち

テコテコ歩くたび、微笑みのタネを蒔いている“ひこにゃん”と“しまさこにゃん”。そのうち出現しそうな、みつにゃりさん、にゃおすけさん…!?

教えて、ひこにゃん その1 17
教えて、ひこにゃん その2 39
佐和山一夜城プロジェクト 25

ヒコネ・プロフィール

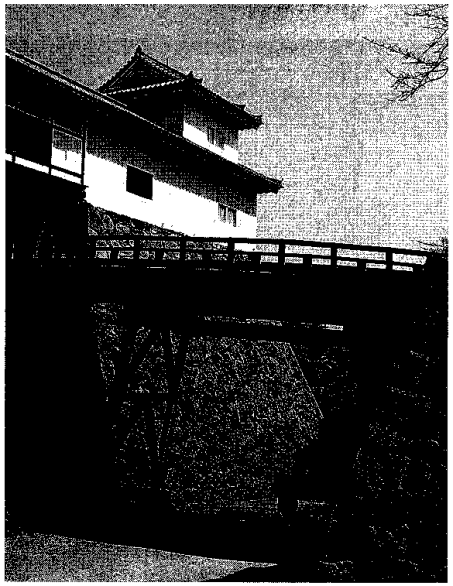
今号で紹介したヒコネの全体像はこちら。

彦根とお城のクロニクル 34
グラビア・彦根風情 35
彦根マップ 40

協力■国宝・彦根城築城400年祭実行委員会　彦根商工会議所　北国宣伝館

彦根城の見方、歩き方

中井 均
織豊期城郭研究会


▲鐘の丸と天秤櫓の間の堀切り

はじめに

彦根城は今、国宝・彦根城築城四百年祭で盛り上がっている。これは天守閣三重に「慶長十一年（一六〇六）」の墨書銘が認められることによる。

ところで、城郭の本質とは「軍事的防御施設」である。その本質を最もよく現すのは縄張りと呼ばれる城郭の平面構造であり、決して天守閣ではないのである。また、城郭の構造を示すものに、普請と作事という言葉がある。普請とは縄張りを構成する土木工事であり、作事とはその上に建てられた建築物を指す。軍事的な防御施設としての城郭とは、まさに土木工事によって造り上げられたものなのであった。

これまで、こうした防御施設としての城郭について分析が加えられることは、ほとんどなかった。そこで今回は、彦根城の縄張りについての見方や歩き方について述べてみたい。

さて、彦根城は今年築城四百年と思われている方が多いようであるが、これは否と言わざるを得ない。慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦の論功行賞によって、井伊直政は近江に十二万石を賜り、佐和山城に入城した。この時代、大坂城には豊臣秀頼がおり、豊臣恩顧の外様大名も西国に封ぜられており、軍事的緊張は極度に高まっていた。そこで、対大坂城の最前線として築かれたのが彦根城であった。

二時期にわたる築城

築城工事は、慶長八年（一六〇三）より開始されたのであるが、その普請奉行として三人（六人とも）が幕府より派遣され、さらに『木俣記録』によると、二十八大名、九旗本に助役が命じられる天下普請であった。こうした幕府主導の築城工事であったことからも、一大名の居城ではなく、幕府の最前線としての築城であったことがわかる。

ところで、彦根城はその形態より平山城と位置付けられている。しかし、彦根山の頂上に城郭を構え、山麓に居館を持つ形態は、戦国時代の城郭と同じ二元的形態であり、城郭部分はやはり詰城としての山城と理解すべきであろう。ただ興味深いのは、慶長八年の築城段階では山麓の居館部は存在せず、居館は

もうひとつの名城・佐和山城

地元の足で三成を追い続けてみれば亡き母の足跡

▲佐和山山頂。標高232mの佐和山にはハイキングコースも設けられている

▲佐和山城の研究を続ける田附清子さん

城郭好きと三成ファンで研究会発足

「三成に過ぎたるものが二つあり　島の左近と佐和山の城」

石田三成の居城として知られる「佐和山城」は、鎌倉時代に土豪・佐保氏が構えた城であると言われている。戦国期は浅井氏の武将・磯野員昌が居城し、織田方との激戦の舞台となった城である。秀吉の時代になり、知行を与えられて佐和山城主となった三成は、城の大改修を行い、往時は「山頂に五層の天守が高くそびえたち、中山道から見あげると、その先端は雲に隠れて見えないほど」と言われた立派な城だったと伝わる。

現在の国道8号線佐和山トンネルの真上、彦根市古沢町から鳥居本町にわたる山の一帯に縄張りが築かれていたことになる。彦根市内の「名城」は徳川方の城（彦根城）だけではない。

家業である工務店の傍ら、「佐和山城研究会」で活動している田附清子さんにお話を伺った。「歴史研究家」という風貌ではなく、三人のお子さんをお持ちの「お母さん」だ。

「研究会は五人の好き寄りでスタートしました。他のメンバーは城郭に興味があり、私は三成が好きでハマったんです。佐和山城跡については十分な調査がされてきていませんでしたし、国・県どころか彦根市の指定文化財にすらなっていないんです。じゃあ自分たちで調べようってことで、講演会や現地説明会の機会を利用して集まったんです」

二〇〇一年の研究会発足前から、田附さんはインターネットの「オンライン三成会」に入り、個人的に勉強していたそうだ。

「三成に詳しい人は全国にいっぱいいるので、『このことに関してなら誰にも負けない』という知識を持とうと思うと、私には佐和山城しかないんです。地元から発信できる情報を足で調べることが大切だと思って、東浅井郡史などを片っ端から調べました。三成が関ヶ原の合戦から落ちのびてきたルートを地名から拾うなんて作業もしました」

▲佐和山のふもと龍潭寺にある石田三成像

▲大手に当たる鳥居本方面から佐和山を見る

独自調査で石垣と鬼瓦を発見

今まで「三成に関する史跡が少ない」と言われてきた佐和山城跡。研究会では、城郭研究家の指導を受けながら古文書や古地図を読み解き、独自に調査を続けてきた。その甲斐あって、二〇〇二年一月には、新しい石垣と「桐紋の鬼瓦」を発見！

「桐紋の鬼瓦は、信長一族か秀吉の有力家臣のみ使うことが許されるものなので、佐和山城が『三成の居城』『総石垣づくりの本丸』であったことの有力な証拠になりました。『五層の天守』には様々な説があるけれど、この瓦が使用されていたということは、それなりの建造物であったということが証明されたと思いますよ」

それまで彦根では脚光を浴びなかった三成と佐和山城。しかし、国宝・彦根城築城四百年祭をきっかけに新しい動きも生まれつつある。彦根市も、文化財指定に向けての調査に動き出したそうだ。これも研究会の功績といえよう。また、六月には、これまでの集大成として『近江佐和山城・彦根城』（サンライズ出版）が発行される予定だ。

「対外的に便利だろうくらいの気持ちでつけた『研究会』という名前でしたけどね（笑）佐和山城って、彦根城と違って〝本当のビジュアル〟が誰にも分からない。みんなが頭の中で自由な〝佐和山城〟が想像できるからこそロマンがあるんですよ」

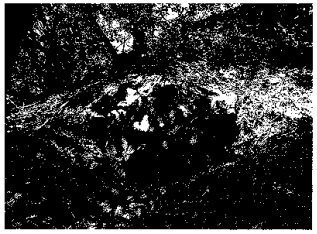
歴史愛好家だった母

ところで、田附さんは、なぜ三成と佐和山城に関心をもつようになったのだろうか。

「実家の真裏が佐和山で、子どもの頃からの遊び場だったんです。実は母も郷土史好きで、母や友人とも一緒に登りました。また、母方の祖母が長浜の出なので、しつけにも教えにも〝三献の茶〟や三成の話を用いたのを覚えています」

長浜ゆかりの教えで育った郷土史家の母。三成の存在は、田附さんの子ども心にもしっかりと馴染んでいたようだ。

「子どもの頃はそれが三成の話とは知らなかったけれど、大人になってから三成に魅力を感じたんです。佐和山も、子どものときはただの〝自然〟だったけど、大人になって、人の手がたくさん加わった城跡なんだと知ったんです」



▲▶佐和山城研究会が新しく発見した石垣と桐紋の鬼瓦片